随想

ど根性

～生きた反射神経を磨く～

加藤　宏光

三月二十日のテレビ朝日のニュース番組「モーニングバード！」で、バルセロナオリンピックの金メダリスト柔道家、古賀稔彦氏の特集があった。同氏は今年弘前大学の大学院博士課程を卒業し医学博士を取得された。バルセロナオリンピックでは、試合の一〇日前の練習で膝の靭帯を傷め、立つのも大変だったとのこと。それでも、絶対に負けない、金メダルを取るという気持ちは変わらなかったそうである。

そして当日、一回戦、二回戦は傷めた膝に負担のかからない巴投げでの一本勝ちで勝利、準決勝では得意の一本背負いを時間切れ四秒前に決め、そして決勝はあくまで攻め続けて優勢勝ちを収め、金メダルを取ったのであった。

氏は『柔道は人生の教科書であり、柔道を通して日本をリードできる人材を育てたい』と語る。

そして、インタビュアーが柔道の理論を科学的に追求し博士号を得た氏に柔道で金メダルを取る方法を聞いたところ、一言『根性ですね!!』との答えであった。サイエンスを極めてなお柔道における勝利の要諦が《根性》であるということに、司会アナウンサーが改めて感嘆の声を上げていたが、著者には然りと思われてならない。

いま一人特集で取り上げられたのが、七〇歳にして現役ボートレーサーとして活躍している加藤峻二氏である。

同氏は今でも活躍しているがこの道五〇年を越える。テレビアナウンサーのインタビューへの応答でも気負ったところはまったくなく、次のように語った。

『毎日負けたくない、という気持ちで走り続けていたら、こうなった。七〇歳になった今でも、二〇代レーサーに負けたくない。負けると悔しくて仕方がない。孫とゲームをしても、負けたくないという気持ちを抑えることができない!!　年齢なりに反射神経や運動能力は落ちている。しかし、とくに練習を積まなくとも毎日のレースが訓練となって、自然に対応する力を生み出している』

その気持ちは純粋で、毎日の積み重ねが時代を作っていることを実感させられた。

テレビやコンピュータを始めとし、データがデジタル化している現代では、思考そのものがデジタル化されている傾向が強い（とくに若い世代では）。そして、デジタルそのものが最も先進的であると考える傾向も強い。しかし、疑いもなく社会の中心には人間がいて、人間のために経済や文明・文化がある。最近大流行のスマートホン（スマホ）はデジタル機器の代表で

あり、時代の申し子であろう。電車の乗客を見回すと、一〇～一五人に一人は携帯電話をいじっているがその大部分はスマホである。そして、若い世代はゲームかメールに熱中している。

ゲームそのものはデジタルシステムで作られているし、メールも送信メカニズムはデジタル機構に依存している。しかし、その内容そのものはアナログである。孤立化しつつある若い世代がメールを通じてそれぞれの繋がりを実感したいと感じていること、簡単なメールに顔文字や絵文字を付けることで、フィーリングを伝えようとしていることはアナログ情報を授受していることに他ならない。

例えば、ワードで「かおもじ」と入力すると（^o^）、（;^;）、（(+_+)）、（^）o（^）等の記号が組み合わさった表現が出てくる。それぞれが、その時の気持ちを表していることは一見してわかる。そのわかる感覚がアナログなのであるといえよう。

人間自体がアナログな存在であり、感性はアナログ感覚そのものである。映画やテレビの動きも少しずつズレた固定画像を二四／秒以上連続して動かすと、目（実際には脳内）に残る残像効果で動いて見える、いわば錯覚を利用しているもので、人間のアナログセンスを応用しているのである。

このように、中心に位置する人間の人間臭さはアナログ感覚から生まれ、それこそが最も重要なものであろう。

デジタルにデータを処理するツールが最新なのではない。データを処理（理解）し、それを応用している人間こそが最先端を行くのである。つまりは、最先端はアナログセンスをいかに磨いていくか、ということに他なるまい。

こうした前提で先の話を振り返ってみれば、柔道選手は過酷な練習を重ね、その結果として試合中に起きるすべてのアクシデントに体が反射的に反応する。限界まで疲労した状況の中で、思考ではなく、第六感の判断に応じた反射反応が勝利を呼び込むのである。これに対して、サイエンスは結果を後追いで分析して理解しているに過ぎない。そして、これは、何も柔道に限ったことではない。すべての超一流の人間の技術やセンスも、これとまったく同じことがいえるのである。

野外で発生する難解な問題を肌で感じることができる人間と、頭で筋書として理解しないとどうにも反応できない種類の人がいる。難解な問題には前例がないことが多い。シックスセンスで反応できる人は直ちに動けるが、理屈の必要な人は立ちすくむことだろう。

先の例で七〇歳のレーサーはシックスセンスで生きているうちに体得した、「生きた反射神経」が、現役生活を支えているのであろう。

どちらが生き残ることができるかは自明であろう。これからプロとして生き残っていくために、いかにも参考になる話であった。